

B K (NH K大阪) ラジオドラマ

都会の救世主

作 やのひでのり

インターネット特別バージョン

登場人物

私 (川田雅美)

女

本田

店員

医者

警官

刑事

ウエイトレス

客 1

客 2

夏の路。

つくつくぼうしがせわしく鳴く。

私 (川田雅美) が歩く。

2、3台の車が通過する音。

N (ナレーション) 私はとてもナイスじゃない気分だ。私はもうすぐ死ぬ。腸が腐っているのだ。痛くて痛くてどうしようもない。薬を飲めばしばらくはおさまる。でもどうしようもないのだ。生きる気力もない。食欲もない。性欲もない。なにもないのだ。だからすごくナイスじゃない気分だ。

商店街の雑踏の音。

N 私は今、運動をしている。運動といってもただ歩くだけだ。ただひたすら歩くのだ。家からそう遠くない大きな商店街。この辺ではショッピングプラザと呼んでいるらしい。そのなかをただひたすら歩くのだ。ここには何でもある。魚屋から電気屋、不動産や家具屋、葬儀屋、何から何まですべてがそろっている。アーケードになっているから雨に濡れることもない。夏はクーラーもきいてて涼しい。私は歩く。ただひたすら歩く。金はない。だから何をかうわけでもない。歩かないといけないから歩くのだ。そう、きっとこれはハリハピリだ。体を動かさないと死んでしまいそうだからだ。

薬屋に入る。瓶を一つ手に取りレジへ。

私 領収書ください。

薬屋 宛名はどういたします？

私 川田です。山、川の川に田んぼの田です。

薬屋 薬代でよろしいですね。

私 はい。

N 風邪薬を一瓶買う。べつに風邪をひいてるわけではない。これをのむと腹痛がおさまるのだ。とてもナイスでない気分するとき風邪薬はいい。私は物書きだ。大学を卒業してあるコンピューター関係の大手出版社に勤めていた。そしてフリーになった。8年間勤めたその出版社を退社したのだ。私は小説家になるのが夢だった。サラリーマンをやりながら、何とかそれを目指していたのだが、どうしてもうまくいかない。そこで思い切ってフ

リーになったのだが・・・。友人のコネでそれなりの仕事にありつけた。しかし、友人が紹介してくれる仕事は決して創造的な仕事とは言えなかった。出版社に勤めているよりはましかもしれないが、私はこんなものを書きたかったわけじゃない。私にはフリーとしてのプライドがある。サラリーマンじゃない。

いちおう、薬を買うのには領収書をもらうことにしている。確定申告の際、医療費として計上するのだ。フリーの特権だ。

私は電気屋に入る。全国にチェーン展開をしている大きな電気屋だ。そういえば先週テレビが壊れた。テレビの命なんてばかばかしい。ほんの数分で煙をあげて死んでしまった。ほんと情けない。

金縛りにもあった。幽霊やその他の類のものを信じてるわけではないが、とにかく体が動かなかったのだ。まいった。金縛りは初めてだ。ある本で読んだが金縛りにあうときは、精神と肉体のバランスが悪いときらしい。私は、おそらく精神がまいってるのだらう。

観葉植物を買ってきた。その本によると部屋の中の植物はいいらしい。私は買ってきたばかりのその鉢をテレビのうえに置いた。そして水をやった。

鉢から水がしみ出して、テレビのなかに流れた。煙を立ててテレビは壊れてしまった。ああ、ばかばかしい。観葉植物なんて買うんじゃない。

電気屋の宣伝のテープの音。
「半期に一度の××セール！ 安い！」
等と言っている。

N 夏も終わりだ。扇風機の半額セールをやっている。テレビもある。ずいぶん安い。メイドイン、コーリヤだ。おそらく数年前より2、3万は安くなっている。

複数のテレビゲームの音。

N 私は電気屋を後にしておもちゃ屋に行った。テレビは買わない。なぜなら私は買い物をするために歩いているのではないからだ。そう、歩くことはハビリなのだ。死なないための手段なんだ。

子供のはしゃぐ声。

N ばかな子供達だ。どうしてこんな事をしているのだらう。なにが楽しいんだらう。私はそのとき腹部に激痛を感じた。まただ。薬だ。薬が必要だ。私は先ほど買ったばかりの風邪薬の瓶のふたを開けた。ほんとうに子供と言うのは馬鹿な生き物だ。しかし、子供がバカであろうとなかろうとどうでもいい。私はそんなことよりも、自分の腹の方が痛いのだ。世界がどんなによくなったってこの腹痛はどうしようもないのだ。痛いのは私の腹なのだ。それが私は辛いのだ。私はナイスになりたい。ベリーベリーナイスな気分。だから薬を飲むんだ。私はおもちゃ屋の中にある子供用のイスに腰掛けた。そして水もなしに数錠飲んだ。

女 はやく逃げて。(エコー)

N 声が聞こえた。

女 早く逃げて。(エコー)

N 今度ははっきり聞き取れた。女の声だ。ふん、幻聴か。金縛りは初めてだったが、幻聴は初めてじゃない。それに、幻聴というものはあまりナイスなものとは言えない。私は独りでいたいのに無理に話しかけられるからだ。

母が子供をしかっている。
子供は大声で泣きわめく。

N ああ、うるさいガキだ。こんなやついなくねばいいのに。

女 はやく。

私 え？

N 突然女が現れ私の手をにぎり早くという。今度は幻聴じゃない。私は突然の事でなんのことが分からない。

女 はやく。逃げるのよ。

私 . . .

女 今説明してる場合じゃないの。早く！

N 私は女の言われるままになっていた。彼女の表情があまりに真剣だったからだ。

女 走って。ここからできるだけ早く。急いで。

N 私は走った。女が私の手を強く握り走るからだ。別に逆らう気もなかった。よく見ると女はかなりの美人だった。まんざら悪い気はしない。私はこのまま走る方がナイスだと思った。走るという行為は久しぶりだ。頬にあたる風が気持ちよかった。

二人の走る足音。

N 1、2分は走ったかもしれない。私は運動不足のせいか息切れがしてきた。情けない。

私 ちょっとどこまでいくなだよ。

女 伏せて。

私 え？

爆音。

N 目の前が真っ暗になった。なにか吹っ飛んだらしい。

「ああ！ 痛いよ」と子供の呻く声。

「助けて」という何人かの弱々しい声。

N 商店街の一部がなにかの爆発で吹っ飛んだらしい。これはかなりひどい。辺りはガラスの破片が散乱している。ここから見えるだけでも5、6人が血まみれになって倒れている。こんな様子じゃ、あそこでゲームをしていた子供達、こうるさい母親もひとたまりもなかっただろう。

女 静かね。

私 え？

女 ね。静かでしょう。さっきはあんなに騒がしかったのに。

私 . . .

女 どう、ナイスな気分になれた？

私 ナイスって . . .

N そうだ。この女は何者なんだ。突然現れ私の手を

女 ベリーナイスでしょう。いいわね。きれいに吹っ飛んだでしょう。

私 あなたはいったい。

女 たばこ吸う？

私 いや、私は。

女 (たばこの火をつける) 助けてあげたんだからお礼ぐらい言ったら。

私 あ。

N 私はこの女から助けられたんだ。もし、あのまま、あそこに行ったら今頃は . . .

女 それとも助けたのはよけいなお世話だったかしら。

私 いや。

女 とりあえず、お茶でもする？ ここで突っ立ってても仕方ないし。

私 救急車、いや、消防車を呼ばないと。

女 とっくに誰かが呼んでるわ。

喫茶店に入る。

遠くで救急車のサイレンの音。

女 何にする？

私 何かが発火したんでしょうか？
女 私はコーヒーでいいわ。あなたは？
私 いったいあなたは……。

ウエイトレスが水を持ってくる。

ウエイトレス ご注文は？
女 ホット。川田さんは？
私 ああ、ミルクティー。
N この女私の名前まで知ってる。誰なんだ。
そうだ、どこかで会ったこと……。
女 ないわよ。
私 え？
女 だから会ったことはないわよ。
私 どうして！？ 僕の思ったことを。
女 びっくりした？
私 ええ。
女 最初はみんな驚くわ。でもこんなの当たり前よ。川田さん。
私 ……。
女 テレビもつたいないことしたわね。駄目よ、テレビの上には絶対鉢植えを置いてはいけないのよ。私の友達もそれでやられちゃったんだから。
私 そうなんですか。
女 そうよ。
N なんなんだこいつは。まるで私の部屋がのぞかれているみたいだ。テレビが壊れたこと。これは私しか知らないことだ。
私 あなたは誰？
女 誰？ (笑う) そうね。……あなたの命の恩人。
私 そうだけど。でも。
女 それはあなたをご存じでしょう。
私 しらない。
女 そうかしら。
N 会ったことあるわけない。こんな美人、一度会ったら忘れようがない。
女 まあ、いいわ。いずれ分かるから。
私 あの……あなたはテロリスト？
女 (笑う) テロリスト？ いきなりね。テロリストだなんて。
私 いや、ごめんなさい。もう、気が動転しちゃって。なにから聞いたていいか分からないし。
女 ふふ。
私 あの爆発、何だったんでしょう。
女 ガス漏れかなにかでしょう。
私 事故ですか。
女 そうね。
私 でもあなたはあの事故のことを事前に知っていた。
女 私、いくところないのよね。
私 え？
女 泊めてくれる。いいでしょ。私は命の恩人なんだから。
私 はあ。
女 今日は何も書けないんでしょう。だから散歩してた。大変ね。物書きって仕事は。
私 え、ええ。
女 私を題材にしたらどう。いい物書けるかもよ。

遠くでパトカーのサイレン。

N 女は私の家に来たがっている。このまま別れてしまうのは惜しいほどの美人だ。私はこの女を家に案内することにした。私の家はここから歩いて10分のところにある。小さいけれど庭付き一戸建てだ。もちろん、自分の力で建てたわけじゃない。6年前父が死んだときその遺産でたてた家だ。

私の家。
玄関を開ける。
カランカランというカウベルの音。

女 素敵な家ね。あれ、これなあに。
私 ああ、犬小屋。
女 犬小屋？
私 でも、もういないよ。
女 そう……。
私 死んだんじゃないんだ。でももういない。
N 女は玄関に置かれた犬のケージが気になるらしい。犬はいない。女房が連れていったからだ。
女 ここ一人で住んでるのよね？
私 そう。
女 広すぎない？
私 そうかもね。
女 想像していた通りね。ほら壁掛けの絵。
私、絵に描けるくらい分かってたわ。このじゅうたんの柄も。そこの扉を開けるとミッキーマウスのぬいぐるみがあるでしょ。
N 妙なことをいう。女はまるで私の家に来たことがあるようだ。

居間の扉を開ける。

女 素敵な部屋ね。気に入ったわ。コーヒー、入れてくださる？
N リビングは20畳ほどの広さだ。中央にカウンターがあり、ダイニングと分かっている。二階には部屋が2つ。かつての女房の部屋は書斎にしている。もうひとつは寝室だ。女はソファに腰を下ろした。
女 ねえ。そこのミッキー、大きいわね。私が今まで見た中で一番大きいわ。
N 私はコーヒーを入れた。いつものブルーマウンテンはきれていた。しかたなく、お中元でもらったインド産のコーヒーをあげた。

コーヒーをドリップする音。

私 テレビみる？
女 いい。テレビは嫌い。
私 そう。
N いい女だ。私は女の隣に座った。コーヒーの香ばしいにおいとブレンドして女の甘い匂いがした。いい匂いだ。グッドだ。ベリーグッドだ。私は我慢できなくなった。女を押し倒し、キスをし、そして舌を絡めた。
女 あん。
私 ……。
N 彼女は全く抵抗しなかった。私は、右手で女の左の乳房をもみながら、どうしてこんな事になっているのかふと、考えた。しかし、そんな考えもすぐに消えた。私はベリーナイスな気分になっていたからだ。ああ、いい気持ちだ。こんなことは初めてだ。

警察。

N そのとき私は目が覚めた。毛布一枚で床に寝転がっていた。私は鉄格子の中にいた。今は昼間なのだろうか、それとも夜なのだろうか。全く検討がつかない。目に付く物といえば、薄汚れた天井、壁、鉄格子そして低い洋式便器があるだけだ。どうして私はこんなところにいるんだろう。ここは刑務所なのだろうか、それとも……。私はいったい何をしたんだろう。私はもういちど今日の出来事をおさらいすることにした。まず、起きた時からだ。起きたらすごくいやな気分がした。今日もまた一日が始まってしまうのかと思うと。昨日とまったく同じ始まり方だ。とても耐えられそうにない。とにかくナイスじゃなかった。日はすでに高く、時計の針は12時を廻っていた。着替えると、すぐに散歩に出た。商店街を歩

き、そして、電気屋へ寄った。いや、待てよ。電気屋の前に、薬局に寄った。そして、電気屋へ向かったのだ。そうだ。思いだしたぞ。

私は、あのとき電気屋のレジから金を抜き取り走り去ろうとしたんだ。そうしたら、店員が私を殴りつけて、・・・私は、とてもイヤな気分だった。そうか。そうだったのか。

電気屋の中。

店員 何をお探しでしょうか。
私 テレビなんだけど。
店員 サイズは。
私 みれればいから。普通の。
店員 B Sなどはごらんになりますか。
私 いや。
店員 ワイド画面などございますが
私 普通のでもいいから。
店員 18インチでよろしいですか。
私 もうちょっと大きい方がいいかな。
店員 それでしたらこれがお得です。
私 ああ、いいですね。これください。
店員 他にも日本製の。
私 これでもいいです。これください。
店員 かしまりました。ありがとうございます。
N 店員は店の奥に在庫をとりにいった。辺りには誰もいなくなった。私一人だ。チャンスだ。私はカウンターの中に入り、レジのキーを回し、トレイを開けた。現金はあまり入ってなかった。しけてやがる。まあ、しかたない。街の電気屋にそんなに現金があるわけがない。
一万円札7枚、5千円札5枚、千円札13枚、合計、10万8千円を抜き取り私はずらかろうとした。そのとき店員がもどってきた。店員は驚き、私の注文したテレビの箱を床に落とした。
店員 お客様、・・・そこでなにをしてるんです。
私 え？
店員 どろぼう！（叫ぶ）どろぼう！

警報機が鳴る。
警報機の声、C.O.

警察署の中。

N いや、違う。私はどろぼうなんかしていない。私は電気屋へ行く前にすでに銀行に寄り充分な金をおろしていたんだ。盗みなんかするはずはない。そう、そうなんだ。だからレジからお金なんかもっていくはずがない。なぜだ。なぜ、私はここにいるんだ。

コツンコツンと廊下を歩く足音。

警官 川田。出る。

鍵をチャリチャリとさせる音。
扉が開く。

警官 取り調べだ。こい。
N 制服の警官がいた。そうかやはりここは警察だ。私はつかまったんだ。
警官 はやくこい。
N 私は、警官につれられて鉄格子の部屋を出た。何もない殺風景な廊下を延々歩き、再びなにもない殺風景な部屋へ入れられた。そこには私服の刑事らしき男がいた。ああ、この風景には見覚えがある。取調室だ。何度かテレビドラマでみたことがある。
刑事 さあ、もう一度最初から聞こうか。名前は？・・・名前は。・・・早く答えろ！
私 川田雅美です。
刑事 川田雅美ね。女みたいな名前だな。・・・それで生年月日は。
私 38年9月25日生まれです。
私 35歳だな。
N 私は現金を盗んだ覚えはない。金には困ってなんかいないんだ。銀行には充分なくら蓄えがある。いや、待てよ。私は強盗したのは電気屋じゃなかった。確か・・・。
刑事 それで、川田。聞いてんのか。
私 はい。
刑事 その、女とはどこで知りあった。

刑事 その、女とはどこで知りあった。
私 女ですか。
刑事 お前と一緒にいた女だよ。名前は何て言う。
私 ……女？
N 私に女の知り合いなんていない。そうだ女房と別れてから私は女なんて……。
刑事 あの女は誰だ。
私 誰の事でしょう。
刑事 ふざけんなよ！

私の家。

N イヤな夢だった。ベリーバッドな夢だ。なんでも警察にしょっ引かれ、尋問されていたんだから。……まいった。私は無性にのどが乾いた。冷蔵庫のなかの炭酸飲料をとりだし、飲んだ。暑い。もう一度冷房をつけた。

電話が鳴る。

N 午前4時15分。誰だ、今頃。こんな時間に電話してくるなんて。
私 (不機嫌に)はい。
女 ごめんなさい。寝てらした？
私 え、いや。
女 ごめんなさい。こんな時間にかけてようと思っ
てなかったんだけど。
私 いや、いいよ。いつでもかけてくれて言ったのは僕だから。それでどうしたの？
女 とくに用事はないんだけど。
私 そう……。
女 ごめんなさい。またかけ直す。
私 いいよ。ちょうど起きてたところだから。
女 そう。
私 昼間はごめん。ほんとはそんなつもりじゃなかったんだけど。
女 いいのよ。
私 女房と別れて、久しぶりなんだ。うちに人が来たのは。女性ではほんと初めて。
女 いいの。本当は私が誘ったんだし。
私 今日、もう一度会えるかな。今度は外で会おう。
女 ……ええ。どこにする？
私 とりあえず……。
N 私は女と都内の某ホテルのロビーで待ち合わせをし、その最上階のバーで飲むことにした。

ジャズピアノの演奏。

女 きれいね。よく来るの？
私 ああ。たまにここから飛び降りるとすごくいい気持ちだろうなって思ったりするよ。
女 そんなこといわないで。
私 いや、ほんとだよ。
女 もったいないわ。
私 え。
女 あなたは今のままじゃおわらない。もっと大きな事がやれる人よ。
私 どうしてそんなこと言えるわけ。
女 私にはわかるんだもの。私には分かる。あなたにはそういう力があるのよ。
私 力？ なんのこと？ そんなもの僕にはないよ。僕には物書きの才能がないんだ。それに情熱もね。
女 知ってるわ。

間。

私 あなた、いったい誰？ どうして僕とここで飲んでるの？ どうして見も知らない僕なんかと話してて平気なの？
女 見も知らない？ もう充分知りあったじゃない。
私 それは……。でも僕は君のことを何も知らない。それでこうやって一緒にいて、……変だと思わないか。

女 思わないわ。
私 変だよ。だって僕はうれしいかもしれな
いけど。君はなににも得しないだろ。
女 そんなことないわよ。私ももらう物をも
らうから。
私 ……お金……はないよ。
女 お金？（笑う）そんなもの。もっといい
物ももらうわ。
私 いいもの？
女 そう、もらうわよ。
私 ……。

間。

N 私は初めて彼女に対して恐怖を抱いた。
私 ……そういえばどうして、君はうちの
電話番号を知ってるの？ 教えてないのに。
女 調べれば分かるわ。
私 君の電話番号、教えてくれる？
女 いいわよ。
私 本当に。
女 ええ、何か書く物？
私 ああ。
N 女はコースターの裏側にペンで走り書きした。
女 はい。これでいいでしょ。いつでもかけ
てきて。
私 ああ。

「オールオブミー」が流れる。

N オールオブミーだ。私の全て。ジャズの
スタンダード曲だ。私は彼女を抱きたくな
った。なぜだか彼女は私の全てのような気
がしてきたからだ。
気がつくと私は、ホテルの部屋で彼女とベ
ットを共にしていた。

F.O. 「オールオブミー」

取調室。

刑事 それで、その女はいったい誰なんだ。
私 わかりません。
刑事 お前、わけもわからんやつと寝たのか。
私 はい。
刑事 け、いいな。うらやましいよ。いい女じゃねえか。
私 彼女を知ってるんですか。
刑事 知ってるんですか？ 知ってに決まってるだろ。
私 どうして。
刑事 どうして？ おかしな事聞くなあ。
私 彼女はどこにいるんです。
刑事 え？ お前の隣にいるよ。
私 隣に？ 隣にって・・・。
刑事 この部屋のとなり。お前と同じ場所に座ってるよ。
私 捕まったんですか。
刑事 捕まったんですかって？ まあ、いいや。あああ、長くなりそうだな。
私 刑事さん、教えてください。僕は何をやってたんでしょう。
刑事 ほんとにおぼえてないのか。
私 ええ。
刑事 まいったな。
私 まさか。爆弾を？
刑事 爆弾？
私 爆弾を仕掛けたってことないですよ。
刑事 爆弾？ こんどは爆弾か？
私 違うんですか。
刑事 もういいよ。これじゃ堂々巡りだ。今日はこのくらいにしとこう。俺も疲れた。明日は早いぞ。ちゃんと寝とけよ。
(警官に)おい。こいつを元に戻しといてくれ。
警官 はい。

都内、繁華街。雑踏の音。

本田 ここでいいんですか。

私 ああ、ここに1時だ。

本田 ちょっと早すぎましたかね。

私 いや、みつかるといけないから。

本田 僕がいるとまずいんですか。

私 そんなのことはないけど。念のためね。

本田 本当に写真撮っても構いませんね。

私 ああ、頼む。

本田 楽しみだなあ。どんな人なんだろう。

私 とにかく美人なんだ。頼むよ。

本田 分かりました。じゃあ僕、ちょっと離れてスタンバってますから。

N 彼の名前は本田智則。私が勤めていた出版社の後輩カメラマンだ。私が彼女の話をしたら、興味を持ってきた。是非、その彼女に会いたいと言う。実は私も本田に彼女を会わせかけた。最近私は自分自身に自信がなかった。彼女にのめり込めばのめり込むほど彼女の美体が見つめなかったからだ。そして疑いを持った。もしかして彼女は最初から存在しないかもしれない、という疑いだ。そう、彼女は私が作り出した妄想なのかもしれない。だから、後輩の本田に頼んでここで私と一緒にいる彼女の写真を撮ってくれるように頼んだのだ。彼女の存在が第三者本田と、さらには写真で確認されれば少なくとも彼女は私の妄想ではないことになる。

1時を告げる時計台のチャイムが鳴る。

本田 来ませんね。

私 へんだな。時間には正確な人なのに。

本田 僕がこんな大きなカメラ持ってるんで警戒したんですかね。

私 まさか。お前が来る事なんて向こうは知らないはずだ。

本田 そうですか？ もし、川田さんの話がほんとだったらその女の人、僕が何しに来たか分かるんじゃないですか。予知能力みたいなやつで。

私 そうかな。

N 全てが半信半疑だ。本田はUFOとか占いとか信じてる奴だ。しかし、私はそうではなかった。少なくとも彼女と逢うまでは。

時計台のチャイムが鳴る。

本田 15分経ちました。まだですかね。

私 ああ。もうちょっと待ってくれ。

N 私は焦っていた。なぜならもしここで彼女が現れなかったら、私はとうとう気が狂ってしまったのかもしれない。そうだ、私は仕事のいきづまりとその焦りで、彼女を作り出したのだ。ありもしない女から助けられ、ありもしない女にキスをし、ありもしない女に好意を抱き始めている。しかし、私にはとても幻とは思えない。彼女との記憶ははっきりしている。今まで彼女には数回会っている。彼女は妄想なんかじゃない。

時計台のチャイムが鳴る。

N 午後1時30分を告げるチャイムがあった。約束の時間からもう30分が経過している。

本田 僕、そろそろ会社に戻らないと、一応昼飯喰うって言って出てきただけですから。

私 もうちょっと待ってくれ。もうすぐ来ると思うんだ。

本田 僕も会いたいですけどね。今日は彼女、なにか急用ができたんじゃないですか。

私 そうかな。

本田 たぶん、そうですよ。時間に正確な人なんですよ。

なんでしょ。
私 そうなんだ。いつもだったら1分も遅れずに来る。
本田 そうでしょ。だったら急用ですよ。
私 ……
本田 また連絡してください。僕、興味がありますから。
私 すまん。
本田 いいですよ。また昼にここで待ち合わせしてください。会社近くですから、すぐ来れますから。
私 ごめん。今度おごるよ。
本田 先輩も、がんばってください。仕事。みんな期待してます。
私 ああ。みんなによろしく。
本田 じゃ、すみません。僕からも電話します。
私 ああ。
N 本田はいそいそと去っていった。その直後だ。彼女が現れたのは。
女 ごめんなさい。(息を切らせながら)
電車が遅れちゃったみたいで。
私 そうなの。
女 ごめんなさい。お昼まだでしょ。
私 ああ。
女 いきましょ。
N 写真は撮れなかった。私はその後何度か本田に写真を依頼した。しかし、彼女はそのときに限って現れなかった。やはり本田が来るのを事前に察知したのか。それとも、もともと彼女なんてこの世に存在しなかったのか。

私の家。
電話をコールする音、10回。

N でない。彼女がコースターに書いた電話番号にかけている。やはりあれは偽物だったか。いや、違う。今は午前4時15分。普通の人だったら眠っている時刻だ。電話に出られるはずがない。私は自分で納得し受話器を置こうとした。

電話がつながる音。

女 はい。
私 あ。
女 川田さんね。
私 あの。
女 ね、ちゃんとかかったでしょう。
私 はい。
女 うその電話番号教えられたとおもった？
私 まさか。
女 思ったでしょう。
私 ……
女 私に嘘はつけないわよ。
私 ……
女 さて、今日はどうしようか。
私 今日？
女 そう、今日よ。
私 うん。あんまり気分が良くないんだ。眠れなくて。
女 じゃあ、銀行強盗でもしようか。
私 銀行強盗？ あまり気がすすまないな。
女 大丈夫よ。本当にすつとするんだから。
N 彼女は私に銀行強盗をすすめた。最初は冗談かと思ったが話が進む度に彼女が本気だということがわかった。私は彼女の虜だった。彼女がやろうと言うことには背けなかった。
なぜなら、彼女と一緒にいるとそれはそれはベリーナイスな気分になれるからだ。今まで味わったことのないほどのナイスな気分。
だから私は銀行強盗をした。

銀行。

「ピンポン、27番の番号札をお持ち
のお客様3番窓口までどうぞ」

私 緊張するな。
女 大丈夫よ。あなたならできるわ。きっと
うまくいく。
私 よし。
女 そのいきよ。がんばって。私はここにい
るから。

「27番の方、いらっしゃいますか」

N 私は懐の包丁を握りしめながら女子行員
のいる3番窓口まで歩みよった。
私 金をだせ。
銀行員 はい？
私 これが見えるだろ。強盗だよ。
銀行員 はい。
私 もたもたするな。
お客1 ああ！（叫ぶ）
N まずい。客が気づいた。
お客1 ああ！ 誰か！
私 何だよ。騒ぐなよ。
お客2 きゃあ！（叫ぶ）
私 騒ぐな！ おとなしくしないとぶっ殺す
ぞ！

人々の悲鳴。
非常ベルが鳴る。

私 畜生！
N なんてことだ！
私は彼女のほうを見た。彼女は冷やかな
目で私を見つめていた。私はどうしていい
かわからなかった。私はその場に呆然と突
っ立っているしかなかった。今更ながら後
悔した。私は何をやっていたんだろう。今
どき包丁一本で銀行強盗が成功するわけな
んかないじゃないか。どうしてこんなこと
になったんだろう。
とてもとてもバッドな気分だった。
彼女は私に近づき小さな声で言った。
女 最低ね。
N 私は頭をなぐられた気分だった。いや、
殴られた。警備員が私の頭を殴ったんだ。
金属の警棒でなぐられた私の後頭部は陥没
し私は意識を失った。

病室。

医者 川田さん。川田さん。
私 ここは。
医者 気がつきましたか。
私 ああ。
N 私は病院のベッドに寝ていた。頭部に激
痛が走った。そうだ。私は殴られたんだ。
医者 まだ動かない方がいい。
私 ああ。
女 大したことなくてよかったわね。
N 女がそこにいた。私の頭には包帯が巻か
れていた。
私 どうしてここに。
女 あなたが倒れたって聞いたからびっくり
したてかけつけたのよ。部長さんもね。さ
っきまでいらしてたのよ。
私 ああ、そうなの。
女 仕事しすぎよ。あなた、最近寝てないみ
たいだから。
医者 意識が戻られてよかった。もう少し経
たらまた様子をうかがいます。では、奥
さん、よろしく。
女 すみません、いろいろお手数かけます。

医者が去る。

私 ああ。（呻く）
女 駄目よ、動いちゃ。倒れたときにね。頭

を強く打ったらしいの。
私 そうか。そうだったのか。
女 そうそう、デザートあるけど食べる？
さっき営業部の女の子3人もお見舞いに来て
てくれてね。

私 ああ。
女 残念ね。女の子に会えなくて。あなたず
っと眠ってたから。ほんと、もてもてね。

私 それであなたは。

女 え？

私 さっきから分からないんだけど。もしか
してあなたは私の。

女 なにいつてるの？

私 ごめんなさい。

女 ほんと頭をつよく打ったみたいね。もう
一度看護婦さん呼びましょうね。

N 彼女は私の枕元にあるナースコールのボ
タンを押した。すぐに男が二人入ってきた。
制服の警官と刑事だ。あのとき、取調室に
いた二人だ。どうしてだ。どうして奴らが
ここに来るんだ。

女 あの。

刑事 お気づきになられたみたいですね。奥
さん、事情聴取いいですか。すぐにすみま
すから。

私 あの。

刑事 いや、手続きですから。ほんの数分で
終わりますから。いいですね。

私 ……はい。

刑事 あなたの名前は。

私 川田。川田雅美です。

刑事 雅美？ 女性のような名前ですね。

私 はあ。

刑事 生年月日は？

私 38年9月25日です。

刑事 というと。

私 35ですが。

刑事 住所は？

私 東京都……。

N 刑事はほんの数分だといったが、私への
事情聴取は30分は続いたと思う。なんで
も私が倒れていたのは会社のある方向とは
全く違う郊外のある商店街の中だったらし
い。刑事たち頭をひねりながら帰っていっ
た。それもそのはずだ。とうの本人が何も
分かっていないのだから。

私は疲れた。もう、誰とも話したくない。
だから寝ることにした。私は女房に言った。

私 おい。カーテンを開めてくれないか。も
う、休む。

女 そう、カーテンね。

女はカーテンを閉める。
そしてドアの鍵を閉める。

私 ドアの鍵は閉めなくていいよ。看護婦さ
んも出入りするから。

女 いいのよ。これで。

私 え？

女 さあ、芝居は終わりよ。役立たず。

私 なんだって？ 何て言った？

女 役立たずっていったのよ。

私 君はいったい。

女 ほんと使えないやつね、あなたは。最低
よ。

私 ……最低。

女 こんどは後がないわよ。ちゃんとやるの
よ。分かってるでしょう。ほんと最低なん
だから。

私 最低、最低……ああ！

女 こんどしくじると死ぬわよ。

私 頭が頭がいたい！ 先生を呼んでくれ。

女 自分で呼んだら？ (笑う)

私 君はいったい誰なんだ。何でもやる！

許してくれ！ 君は僕の……僕の、何なん
だ！

女 (不気味に優しく)あなたには才能があ
るの。まだそれに気がついてないのよ。い
い、私の言うことを聞くのよ。私が才能を

伸ばしてあげる。
N 私は腹が痛くなった。そう、いつもの病
気だ。薬がいる。風邪薬だ。早く風邪薬を
飲まない。私の鞆はどこだ。そこに入っ
てるはずだ。早くあれを飲まない！
ベリーバッドだ！

都内、駅前広場。

N 昼下がりの日曜日の駅前広場、私はベン
チにこしかける。
しかし、ここは決してナイスな場所ではな
い。人通りは多いし、車のエンジンもせわ
しい。私の右隣に男が座っている。年齢は
25、6歳ぐらいだろうか。日に焼けた肌
が遊び人風だ。おそらく待ち合わせだろう。
右足を小刻みに上下にうごかしている。男
は2本目の煙草に火をつける。騒音情報が
52ホンを示している。
男の貧乏ゆすりが止まった。待ち合わせの
相手がきたようだ。女だ。想像していた通
りのバカ女だ。体のいたるところに貴金属
がぶら下がる。ミニスカートに長い髪、日
に焼けた肌。女は男の3、4m程手前で立
ち止まり右手を縦にして「ごめん」と謝る
ジェスチャーをした。「遅いよ」というと
男はゆっくり立ち上がり女の腰に手を回し、
そして二人は去っていった。
ふんい気なもんだ。何も考えずに生きて
る馬鹿どもよ。
死んでしまえ！（エコー）
あと10分もすれば、この駅前広場はきれ
いな更地になるだろう。
なぜ、そんなことが分かるのかって？
それは、私がテロリストだからだ。それも、
普通のテロリストではない。完全にフリー
なテロリストだ。だからどこかの組織に属
しているわけではない。政治的な思想など
まるでないのだ。
今日私はこの駅前広場の中心の花壇の下に
小型時限爆弾をしかけた。小型といっても
破壊力はすさまじい。プラスチック爆弾だ。
爆弾は彼女が届けてくれる。相変わらずい
い女だ。
以前私はあるデパートの玩具売り場にこれ
と同じ物を仕掛けたことがある。一瞬のう
ちになににもなくなった。子供達の悲鳴さえ
も聴こえない。プラスチック製の玩具は当
然のこと、ショーウィンドウのガラスさえ
も解けて形を失った。
生きとし生ける物、それだけじゃない。形
のある物すべてが原点に戻るのだ。真っ白
な灰になるのだ。きれい。真っ白な灰は
きれい。
何も無い。争いもない。欲望もない。
私は、社会に貢献しているのだ。この腐り
きった世界から抜け出せずに苦しんでいる
者達を解放している、救世主なのだ。
仕事のあと彼女はほめてくれた。あの日の
銀行での失敗を許してくれたのだ。私は彼
女にとって最低な男から最高の男になった。
彼女はとてもいい女だ。
ナイスだ。ベリーベリーナイスだ。
今度の仕事もおそらく成功だ。もうすぐ分
かる。
もうすぐ爆発の時刻だ。そろそろ立ち去る
とするか。私は、ベンチから立ち上がろう
とした。
いやまてよ。私はふと思った。今回はこの
ままここにいてみようか。このまま灰にな
るのも悪くはないかもしれない。灰になっ
た私を彼女はなんと言うんだろう。彼女は
ほめてくれるのだろうか。それとも「最低」
と言うのだろうか。
彼女の存在が本当だったら、私はきっと灰
になれる。私は彼女を愛している。彼女は
妄想じゃない。もし私が灰になることがで
ければ私は正常だ。

もうすぐ爆発の時刻だ。
早くナイスな気分になりたい。

終